「高 校 風 土 記」1976（昭和 51）年 新聞連載コピー （3/4）

高校風土記 相馬⑮ 〈227〉

題字は浜名忠雄相馬市長（26回・昭和3年卒）

陸上部

浜三部中等学校陸上競技大会優勝、北日本中等学校陸上競技大会フィールド優勝、総合二位……。陸上競技部は昭和十年ごろ全盛を極めた。青田峯雄（昭12）＝福島大学教養学部助教授・県陸連常任理事、島岡敏雄（同）と小泉清三郎（昭11）＝相馬市養護学校教頭、小泉洋一（昭13）＝鹿島町立上真野中学校教頭＝兄弟らが活躍。同部の歴史に輝かしい足跡を印していった。

そろって活躍したのは昭和十年十月、仙台二高主催で開かれた第八回北日本中等学校陸上競技大会。フィールドでは島岡が走幅跳と砲丸投一位、棒高跳と三段跳二位、走高跳五位。青田は棒高跳一位、走高跳三位と抜群の成績で優勝を決めた。トラックでは兄の小泉清三郎が百㍍一着、二百㍍二着。弟の洋一は百、二百㍍ともに三着。八百㍍リレーでは小泉兄弟に田原口稔（昭11）らが加わって二位と健闘、相中の名を高めた。

青田らの活躍は、この他にも目覚ましい。とくに小泉らは兄弟選手で名を売った。清三郎の兄守治郎（昭9）＝元新地郵便局長＝も元陸上部の主将。一時は三兄弟で競技場をかきまわした。清三郎と洋一が同じレースで一、二位を競う場面も見られ、これが記録更新に結びついた。その結果は清三郎が二百㍍で県中新をマーク。洋一は昭和九年の東北大会で百と二百㍍に優勝、十二年の明治神宮大会でも百㍍で優勝している。また青田は昭和十一年、甲子園で行われた全日本中等学校陸上競技大会のハイジャンプで三位入賞した。

相中からの参加は青田だけ。部長の佐藤利穂が急用で同行不能となり磐中生と一緒にいかされた。「大阪など遠出は初めてで実に心細かった。そんなことを察してか松田一教諭から〝がんばれ〟の電報をもらった。電報をハチマキに忍ばせてがんばった」と青田は懐かしむ。

県外強豪と十分戦える選手を大会に送り込むまでには長い道のりがあった。陸上部が創設されたのは大正十年。当時はトラックもなければ専門に教えるコーチすらいなかった。県大会が福島市の福島競馬場で催されたところで、部員たちは妙見神社の参道をグラウンド代わりとした。道具もなく走高跳のスタンドなどは手製、バーの代用は縄でひっかけるとスタンドごと倒れ、打ちつけてあるクギで顔をひっかく者もあった。技術面は本を頼りの研究。二高にいった吉田序孝（大11）＝医院経営＝や弘前高で陸上部にいた馬城会会長の今野源八郎（大12）＝東大名誉教授・早稲田大商学部客員教授・経済学博士＝らが休みを利用して来校、指導に当たったという。

「伸び伸びと練習ができる競技場がほしい」――が部員たちの願いであったが、町の青年たちの協力があって長友グラウンドを整備し県内では初めてともいわれる直線二百㍍、一周四百㍍トラックのある立派な競技場ができた。トラックには炭カスが敷きつめられ「ローラ引きが大変だった」東海林登（昭13）＝相馬市総務部長＝と整備は一苦労だったが、こうして陸上部の基礎は築かれたのだった。

（敬称略）

次回は26日掲載

〝兄弟選手〟全盛築く

名声をとどろかせた四選手。青田峯雄（上段右）島岡敏雄（同左）小泉清三郎（下段右）小泉洋一（同左）＝相馬郡新地町、小泉清三郎さん提供

高校風土記 相馬⑯ (228)

題字は浜名忠雄相馬市長（26回・昭和3年卒）

排球部

排球部は終戦間もない昭和二十一年四月に創設を見た。「バレーボールなどというものは女のやることだ」とされていたがスポーツ好きな杉崎隆（昭22）、石田雅郎（同）＝浪江高教諭、鈴木泰英（同）、太田信（同）、熊耳敏（同）＝相高教諭、大曲淳介（同）＝薬店経営、木幡功（昭21）＝銃砲店経営、伏見宗男（同）らがこぞって入部し、コートに青春をぶつけた。

北庭の一隅にコートを作ってスタートした。ネットは戦前、軍事教練で使った擬装網。ドッジボールやサッカーボールの代用品を使って練習に励んだ。部長は庄司国男（昭9）＝相馬女高教頭。庄司は精神面の指導、技術は日体大バレー部で活躍した吉田孔彦（和17）＝浪江高教諭＝がコーチをかって出た。そして「ファイティングスピリット、フェアプレー、フレンドシップ」の〝三F〟をモットーに伝統の基礎は固められていった。

吉田らの指導の成果は創部三年目にして早くも現れた。昭和二十三年、インタハイ県予選に挑んだ佐々木三夫（昭24）を主将とする但野寛（同）、伊東忠徳（同）、関場利夫（同）、塙満（昭25）＝浪江高教諭、立谷薫（同）、田中剛雄(同)、鎌田昭雄（同）、半杭秀吉(同)、羽生賢次（昭26）＝歯科医副院長、鈴木三夫（同）、目黒博(同)＝相馬市立中村一小教諭＝らの相高チームは奮闘した。佐々木、塙の繰り出す〝お家芸〟のクイック攻撃はズバズバと決まった。宿敵福商を2―0のストレートで破って初優勝を飾った。

勝利の口火を切り、気をよくした強豪〝相高チーム〟は、とどまるところ知らず敵なしであった。初優勝以来二十六年までにインタハイ県予選、県下総合体育大会四年連続優勝、東奥羽大会三年連続優勝、三県（宮城、山形、福島）対抗戦二年連続優勝、東北大会四回出場、全日本高校バレーボール大会二回出場、国体二回出場（二十四年大会で本県初の三回戦進出）、また全日本選抜バレーボール高校男子東西対抗には二十五年度羽生、二十六年度氏家（旧姓荒）仁（昭27）を送り出すなど目覚ましい活躍を見せ、黄金時代が築かれたのだった。

黄金時代の樹立はモノ不足や練習場にも恵まれず悪環境との戦いでもあった。室内練習場は講武道。「低い天井のハリの間を通さないとサーブが決まらなかった。それが好結果を生みコントロールがよくなった」と吉田。ボール修理は一年生の仕事。「新しいボールが買えず家まで持って帰って修理。ひどいのは三十カ所もつぎはぎしたのがあった」と羽生。また食糧事情も悪く「県外遠征のたびに米や野菜を背負っていった」と塙たちはふり返る。

こうして積み上げられた伝統の中からオリンピックのゴールドメダリストの佐藤哲夫（昭42）＝富士フイルム＝が生まれた。育ての親である吉田は「素直で私のいう通りに技術を習得した。パスの手つき、ボールを追う感覚は抜群だった」と述懐。相高生一同、モントリオールでの活躍を期待している。ガンバレ佐藤――。

（敬称略）

次回は29日掲載

創設三年目に優勝

全盛を極めた相高バレーチーム。昭和25年、名古屋国体で（原町市二見町・熊耳敏さん提供）

高校風土記 (229)

相馬 ⑰

題字は浜名忠雄相馬市長（26回・昭和3年卒）

蹴球部

昭和二十五年秋、相高チームは全国高校サッカー選手権大会県代表権をかけて強豪、学福工チームと激突、信夫丘陸上競技場に熱戦を展開した。双方譲らず得点なしの緊迫した戦い。夕やみせまり時間切れと見られた一瞬、攻めまくる相高の神戸恵二（昭27）＝製材業＝の前に絶好のボールが転がった。神戸はここぞとばかりけった。強力なキックはキーパーが阻止できるものではなかった。

「馬陵の城の名に負える 春の若駒勇ましく……」夕暮れの信夫丘に応援団の歌う校歌が流れる。初優勝の喜びに酔った殊勲の神戸、長谷川子易（昭26）、岡村牧夫（同）、渡辺和夫（昭27）、大橋真澄（同）、菅頭裕（同）、玉田光夫（同）、酒井重雄（同）、松田武久（同）、鎌田光三（同）、小椋（旧姓箭内）昭康（昭28）らの顔からはうれし涙がポロポロとこぼれた。

蹴球部の誕生は昭和二十四年。設部二年目にしての劇的な初優勝は伝統樹立への大きな足がかりとなった。三十年の全盛期には「相高チームとぶつかれば勝ち目はない」といわれ県下高校サッカー界では無敵を誇った。国体出場を抽せんで涙をのんだという〝三十年組〟には平沢四郎（昭31）、小室山勝雄（同）、永田恒造（同）、八巻均（同）、杉本礼祐（同）、岩佐正平（昭32）、佐藤秀勝（同）、山崎光（同）、豊田晴一（同）、林和彦（同）らがいた。また三十七年には神戸の弟である主将、神戸和正（昭38）らが第二期全盛時代を築いた。

厚いカベと鋭い突っ込みが武器で県大会はすべて制覇し、東北大会でも山形、青森を破って気を吐いた。四十七年には佐藤勝博（昭48）、渡辺共治（同）、山田洋（同）、山田進一（同）、田中昭美（同）、猪狩広信（同）、畑中正志（同）、斎藤忠雄（同）、門馬哲男（同）、遠藤清隆（同）、荒川修（昭49）らが先輩たちの夢でもあった全国大会出場（山形）を成し遂げた。二回戦で敗れはしたが、馬陵健児の根性を示した。

そして部員たちは全国高校サッカー選手権福島県大会で十一回（25、28、29、30、31、32、33、36、37、38、39年）、県高校体育大会で九回（30、31、32、33、36、37、38、39、47年）、県総体で八回（29、30、31、33、36、37、38、47年）、県選抜高校サッカー大会で二回（45、47年）と実に通算三十回優勝。輝かしい足跡を印したのだった。

血と汗と涙で築いた目ざましい活躍は創設当初からいた部長と小泉義康（昭17）、卒業してからもグラウンド通いをやめなかった神戸恵二の力が大きかった。

「やる以上は負けられぬ」。神戸のコーチは厳しかった。「いいかげんな練習をしているとウサギ跳びでグラウンド五周もさせられた」「練習が終わるとやさしかったがグラウンドではオニに見えた」と平沢らは〝オニ監督〟の徹底ぶりをふり返る。一方、神戸は「当時は走るサッカー、体力のサッカーで走ることを中心に根性を鍛えた。スパルタ式で選手には厳しかったがみんなよく耐え、ついてきてくれた」と懐かしむ。（敬称略）

次回は30日掲載

優勝、通算三十回も

昭和25年、初優勝を飾った部員たち

（相馬市中村、神戸恵二さん提供）

高校風土記 (230)

相馬 ⑱

題字は浜名忠雄相馬市長（26回・昭和3年卒）

新校舎完成

床は抜けギシギシと鳴る。窓から風がヒューヒュー。天井からは雨がポタリポタリ。「雨のたびにバケツを並べるのに大忙し。激しいときはカサをさして授業を受けた」と永井千昭（昭37）相馬市福祉事務所援護係長。多くの先輩たちのにおいのしみ込んだ思い出の学舎は明治三十二年に建てられた木造平屋の校舎。六十年近い歳月で老朽の度合いは極に達していた。

「相馬地方の最高学府であり早期改築を──」生徒たちの悲鳴を聞きつけたPTA、馬城会、地元市町村が三田四郎（明36）中村町長を会長とする校舎改築期成同盟会が昭和二十八年に結成され、県や県議会へ陳情、実現に向けて奔走した。地元が建設費の三分の二を負担することで改築がようやく認められ、二代目会長の横山宗延（大4）相馬市長となって本格的な寄付集め。同時に校舎は木造ではなく鉄筋コンクリート建てにするよう強く県に要望した。

そして三十一年二月、第一期工事完了、総額九千六百七十三万三千円（うち三千万円地元負担）をかけた鉄筋コンクリート三階建て、暖房完備の県下初の超デラックス校舎（二棟、延べ面積四千四百八十八平方㍍）が出現した。

生徒たちは完成したところから上級生の順に〝入居〟した。下級生たちは利用できても理科実験室などの特別教室だけで相変わらずの旧校舎住まい。一年間じらされ、ようやく移った瓜生哲也（昭36）は「入れたときはうれしかった。優越感にひたり旧校舎にいる下級生をひやかしにいったものだった」。

三階建ての大型鉄筋ビルは当時相馬市内では初めてのもの。生徒たちは屋上に上がってはしゃいだ。「屋上から見おろして下を通る女子学生たちをよくからかった。そんなことをしているうち〝金の鳥カゴにすずめが入っている。お前らはすずめだ〟などと言われたことがあった」と佐藤和男（昭34）＝小高工高教諭＝と佐藤光雄（昭33）＝相馬市税務課課長補佐＝は口をそろえる。

新校舎は土足が許された。だがゲタは厳禁。白線入りの帽子をかぶって高ゲタをガランゴロンと鳴らして町をかっ歩、蛮カラ風を吹かしたものであったが、新校舎に入ってからは、みんなズックグツとなり蛮風も薄れていったという。施設の改新築はその後も着々と進められ、体育館、音楽室、図書館、柔道場、プール、グラウンドなどが整備されて現在に至り〝近代学園〟が形成された。

新校舎建設のツチ音を聞きながら〝入居〟できずに卒業となった組には阿部喜八郎（昭31）＝喫茶店、岩本由輝（同）＝山形大助教授、稲葉久（同）＝飯舘村役場、太田正敏（同）＝農業、小野哲郎（同）＝明治学院大助教授、海東行夫（同）＝海東乳業、菅野豊（同）＝鹿島町農業共済組合、新開武（同）＝歯科医、立谷幸雄（同）＝立谷商会、長谷川修三（同）＝相馬高教諭、只野康保（同）＝鹿島町役場、森仁一（同）＝相馬電報電話局＝らがいる。（敬称略）

次回は7月3日掲載

暖房完備で優越感

中庭つきのデラックス校舎＝相高提供